吉林からの引揚げ
～悪夢の逃避行～

高橋 ヨシミ（東町1）

高橋さんは、昭和十九年の秋に叔父さんたちと一緒に満州国へ渡りました。翌年終戦を迎えると、日本への引揚げを開始。途中、収容所に入り、つらい日々を過ごし、やっとの思いで母国の土を踏んだそうです。「戦争になれば男たちは戦地へと出向きます。そして、残された女性と子どもは食料難や空襲で苦しい生活を強いられ、毎日おびえていました」と話しています。

終戦間近に旧吉林市へ渡満。毎年八月十五日を迎えるたびに、当時の光景がはっきりと甦ってくる。終戦を目前にして、叔父は関東軍から最後の召集を受けたが敗戦、残された女児達は敗戦国民として吉林で過ごし、二十一年秋、引揚げにより帰国した。

内地に於いても外地に於いても、戦争の災禍は否応なく蒙っているが、満州という特別な地域にあり、しかもソビエト連邦の参戦、そして満州国への進撃という事態に、在満日本人は極度の混乱に陥り、多数の犠牲と苦難の生活を余儀なくさせられた。私は引き揚げて、一応はこの体験を書かないでいられない気持ちで五十年もたった。古稀を迎える年でもあり、渡満から帰国までの痛手を受けた順に書き留め、そして当時を偲び、混乱のときに望郷の想いを果たすことなく、無念に逝かれた多数の方々に鎮魂を心からお祈りしたい気持ちと、敗戦によってショックを受けた戦争にまつわる思い出を話したいと思います。

◇ソ連機の空爆と略奪◇

終戦前の夜中に、突然ソ連機の空爆があった。照明弾を落とし、真昼の明るさにしたうえ、爆弾を投下して、まさに花火空の模様だった。満人地区に落ちたので、一時は命拾いをした。吉林省本部裏のヒマ畑で一夜を過ごし、明け方漸く安堵した。

町へは多数の戦車が進撃し、早々ソ連軍は略奪を始めた。まず空砲を二、三発打ってから、二重戸のドアをこじ開け、靴で家屋へ侵入し、トランクに纏めて整理した冬物の衣類や着物、装飾品等を全部蹴散らし、必要品を詰め替えて、持てるだけトランクを運び去った。その恨みは今も心の隅に残る憎らしい痛手である。

一方、国内では中共軍と国府軍に分かれて内戦が多発し始めた。両軍は互いに逃げ隠れする人を追いながら、民家に無差別に銃を持って侵入。満語で脅しにかかるが、言葉すら解せないため、おびえる胸中。早口や大声の言動で目ぼしい金品があれば、両軍共強奪し、持ち去った。

日本の敗戦と同時に暴動も頻繁に起きた。孤立した民家であれば、ことさら小人（子供）を先頭に石や棒を持たせ、戸や窓を壊してから土足で家に入り込み、後から集団で大人達がドッと押し込む。命をも取らんばかりに裸同然にする襲撃が方々であった。逃げまどう婦女子等が一命を落とした話も随分と見聞きした。敗戦の惨めさは今のニュースどころではなかった。今でもその様子が映されるとゾッとする。

◇開拓団の避難民◇

当時、私は吉林市避難民の援護に携わり、駅前広場に各地から集まった開拓団員達を無事に蓋車や貨車に毎日乗降させる手伝いをしていた。避難民はよれよれのワカメのような衣服、汚れて臭いのする体にやっと布を纏わせてはいるが、体はローソクの火が灯る芯のようにか細く、骨の突出した姿、息もたえだえに古木の枝に縋り足を引きずって歩く姿等は、涙の出る暇さえ与えないほど、哀れというか悲惨な敗戦国の運命的な姿としか云いようがない。町へ漸く着いても、どれほどの人命を失ったであろうか。中国人の養父母に預けられ、日本に一時帰国するまでに成長した中国人の方が寧ろ幸せとも思う年になってきました。

◇吉林市からの引揚げ◇

夏ごろ、吉林市民もいよいよ避難行が始まって、私達は最後の引揚者でした。背中には大きなリュック、両手に袋物、殆ど食料品だったと思う。男装して外出したら、満人の奥さんから別れに満靴を貰った。手製の新しい品を入口に置いた途端、小人がいち早く見つけ、満靴をサッと術者のごとく持ち去った。唖然と見過ごすほか方法もなく、今でも何を覆いて帰ったか記憶がない。財布さえ手堤に入れてあれば、満人はひったくりをする現状であったし、引揚者の周りにうろつく他民族が獲物を狙って持ち去る後ろ姿が、何とも云えず今も目に映る。

引揚者全員は無蓋車へ……、一車両にいくつかのグループの人達が押し込まれ、一端腰を据えたら、もう身動きも出来ず、荷物を背に下に敷いて居眠りをし、持ち物の乾パンと保存食を少々食べ、汽車が止まると用便を、乳児のオシメには洗い紐を張って風を当て、頭の上で乾かして走ってた様子が目に沁みる。雨になるとそれこそ大変、風呂敷といい服等を襷ぎ合わせて早変わりのテントにし、大陸を一路南下するのであった。

列車は奉天で急停止させられた。満人が労役の命令をしたのだ。男子が何十人も労働に従事させられ、終了まで止まったまま動かず、無一物同然の引揚者は一握りの米もなく、空腹をこらえ、水を飲みつつ腹を満たすしかなかったが思い出させない……、残念とも無念とも。

汽車に揺られて何日か、南満州のどの地で下車したのか、○○収容所へと……。私達は体調が悪く、歩行困難のため、馬車に高金を払い乗せてもらった。他の人は難民歩行、どの地をどう連れて行かれたか、随分遠かったのを覚えている。その地で三週間位も何百人の集団生活で野宿もした。爆撃があった建物の片隅に荷物を背もたれしての寝起き、コーリャン粥と米軍のDDT散布を全身に浴び、集団の病気駆除が印象的。共同野宿をしたその収容所から引き返し、また無蓋車に乗せられて列車は原野を南下したようだが、地名は不明。そして△△収容所入りをしたが、その地は暖かく雨も少なかった。比較的若者だけが毎夜輝く星空の下でアンペラ一枚を敷き、キラキラと輝く大きな星を眺め、着のみ着のままで過ごしたのが三週間位。何時船に乗せて貰えるかを星に祈り、毎夜涙して望郷の念と親兄弟を懐かしく、叫びたいくらいの気持ちで過ごした日々であったかは、言葉では云いつくせないやるせない気持ち。

◇引揚船・帰国の途◇

最後の△△収容所からまた列車に押し込まれ何時間走って着いたのか、船の見える港へ。忘れもしない引揚船帰国の途である。列車から飛び降り、荷物も重いとは感じないほど、海風を存分に吸い、ひた走りに一目散に船めがけて蟻の行列のように走り寄った。心よい曲が流れている目の前が涙で雲り、前の人につられ、足早に船内へと続く。他の収容所からの合流もあって、船内は四、五百人位の集団だったと思う。病人である四人は、二等船室のジュータン敷の部屋に入った。

アーア!!日本へ帰れるぞと思う反面、何日船に乗せられ、無事日本に着くのか不安、船は雲仙丸であった。乗船降船には米軍がDDT散布をしてくれて、ありがたい気持ちでいっぱい。

日本の海や山や川、町を見るまでは死ねない。あと何日かの航海は残っている。周囲は皆日本人だけになり、船内も日本の一部となったのだ。どんなに気が休まったことであろう。

喜びの中にも複雑な思いでの出航の合図、満州を離れさらば……と叫びたい瞬間ですらあった。蛍の曲を夢うつつの中で精一杯耳にし、手足をうんと伸ばして、とめどのない涙を目にしながら、存分に寝入ったことであろうか。

三、四日間、海の旅で無事博多に着く。吉林市引揚げから帰国まで、その時の時に多くの方々からお世話になりました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。上陸を間近に発疹チフスが出たため、二、三日上陸が延期になり、みんながっかりする。博多の夜のネオンの明かりを見ながら長い長い停泊であった。

――――＊――――

（注）

①満州国　日本が満州事変によって中国東北部に作り上げた国家で、終戦とともに消滅した。旧吉林市は満州国の古都といわれていた。

②無蓋車　屋根のない列車のこと。

③DDT　アメリカ軍が使用した殺虫剤。これを人の体に散布して、しらみを駆除した。

お買物、ご用命は市内で

誰にも聞けなかった
お葬式（法事）のしきたり
遺族側も会葬者もこれで安心
無料相談☞昼間専用☎24－7613

法要・小人数葬儀～社葬まで
紫雲殿
遠来のお客様も宿泊OK
新津市東町1丁目
☎(24)8330 FAX(24)9236

戦後50年・写真展にご応募ください

◇写真展開催日　10月15日（日）
◇ところ　市民会館大ホール
◇写真の内容　戦中・戦後の新津のまちの様子や市民の生活ぶり、出来事などを撮ったもの
◇応募方法　撮影日、撮影場所、写真の内容を明記して、写真のネガ（ネガがない場合は写真）を送ってください。
◇応募先　9月22日（金）までに、新津市企画調整課広報秘書係（〒956新津市程島2009番地、☎24―2111内線331）へ。
※くわしいことは、広報9月1日の9ページをご覧ください。

戦争体験手記を読んでの感想などをお寄せください。
・送付先…新津市企画調整課広報秘書係（〒956新津市程島2009番地、☎24―2111内線331）へ。

お買物、ご用命は市内で

'95 七・五・三 衣裳セット
ご予約の方に お祝い品プレゼント
Bridal Salon 伝 丸伝
新津店 本町一丁目☎(24)3355㈹ 新潟店 古町九番町☎025(228)5881

雨もり補修・屋根工事
技能士のいる店
㈲関口瓦工業
新津市草水町3丁目 TEL22-0984